Hillbilly Elegy:
A Memoir of a Family and Culture in Crisis
『ヒルビリー哀歌：危機にある家族と文化の思い出』

トランプに投票した ヒルビリー・カルチャー

米国東部に横たわるアパラチアと呼ばれる地域は、アパラチア山脈の両側に広がる13の州を巻き込む広大な地域だが、そこに住む2,500万人の主に白人の市民は、ヒルビリー、レッドネック、ホワイト・トラッシュなどと呼ばれる、米国の中で最も貧しい、メインストリーム文化から隔離された人たちである。昨年の11月、多くの米国人の予想を裏切って誕生したトランプ大統領は、主にこの地域の住人たちの支持を得て生まれたものだ。本書は、アパラチアに属するケンタッキー州に生まれ、オハイオ州で子ども時代を送った著者による一種のメモアールである。同時に、トランプを支持したヒルビリーたちの生き方やモラル、カルチャーを、理解と同情と、哀愁をもって解明している貴重な本でもある。米国の東海岸・西海岸に住む人の中で、この文化に触れたことのある人はそれほど多くないはずだ。また、いたとしても、ヒルビリーと呼ばれる人たちの本質を理解している人は少ないだろう。その意味で、本書は、いま、この時点で、米国に生きる人にとっての必読の書である。少なくとも、トランプがなぜ当選したかの謎は解けるはずだ。

ヒルビリーの哀歌

著者J.D. バンスは、ケンタッキー州で生まれ、オハイオ州ミドルタウンで育った、自称“ヒルビリー”である。だが、彼は、ほとんどが高校もろくに出ていない貧しく無知なヒルビリーとは違い、オハイオ大学を経てアイビーリーグの名門イェールのロースクールを卒業したエリート

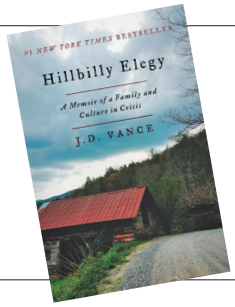
自身もヒルビリー出身の著者J.D. バンス
photo：Naomi McColloch

である。現在、シリコンバレーの大手投資会社の社長として活躍する今年31歳のエグゼクティブだ。

だが、本書はそんないまの彼からは想像できない生い立ちを説明する、こんな言葉で始まっている。「私はラストベルト（注：荒廃した昔の工場地帯）の一部、オハイオ州の鉄の街の貧しい家庭で育っている。私が覚えている限り、街ではいつも、仕事も希望も失われ続けていた」

バンスは在学中に妊娠し、高校を中退した女性の2番目の子どもとして生まれている。バンスの子ども時代、さまざまな精神的、経済的な問題を抱えた母親は、十数人の男性と同棲や結婚をくり返し、バンスはそのたびに違う父親と暮らさねばならなかった。鎮静剤依存症で、ヒステリックな母親との生活は、家庭内暴力の絶えない惨めなものであった。バンスはそれから逃れて、彼がマモーウ、パポーウと呼ぶ祖父母の家に入り浸り、2人を実質的な親として育っている。スコッチ／アイリッシュ系の白人であるパポーウとマモーウは、ケンタッキーに定住している白人の多くがそうであったように、工場や炭鉱で働いたり、小作人として農耕などの仕事をして暮らしていた。が、第二次世界大戦が終わると間もなく、当時日の出の勢いだった製鋼会社アームコ（Armco）で働くために、祖父母はバンスの家族を連れて、ケンタッキー州からオハイオ州のミドルタウンに移住した。マモーウとパポーウは、常に拳銃を肌身から離さない、粗野で教育のないヒルビリーであった。パポーウは毎日泥酔して帰宅し、そのたびにマモーウとの間でつかみ合いの喧嘩が絶えなかった。だが、孫にあたるバンスと彼の姉のリンゼーには、深い愛情をもって接した。母の暴力を逃れて、祖父母の家に入り浸りになっていたバンスは、彼らからいわゆるヒルビリー・カルチャーの良い面、ポジティブな面をたたき込まれた。「ヒルビリーは、自分たちの忠誠心、面目、そしてたくましさを誇りにしている。強い、正真正銘の愛国心、勤労精神、緊密な家族関係、そして物事の善しあしをヒルビリーの正義感をもって決めるのだ」とバンスは書いている。例えば「5歳のときに最初の鼻血を流し、6歳で目の周りに黒いあざをつくった。両方とも母親を侮辱した相手と喧嘩になったからだ」。喧嘩のあと家に帰ると、マモーウは彼を叱る代わりに、いつも「よくやった。あっぱれだ！　家族の悪口を言うやつはたたきのめしてやれ！」とバンスを褒めた。

著者自身がヒルビリーであることに誇りを持っていることは、本書の隅々に垣間見える。ヒルビリーを語るとき、著者は常に敬愛と尊敬、深い理解を示している。だが同時に、バンスはヒルビリーが説く信念と、彼らの実際の行動の間に、大きなギャップがあることも認めてい



書　　名：Hillbilly Elegy:
A Memoir of a Family and
Culture in Crisis
著　　者：J. D. Vance
出 版 年：2016年
出 版 社：Harper Collins
ＩＳＢＮ：978-0062300546
広告図書館分類番号：466-VAN

かえで せびる●青山学院大学英米文学科卒業。電通入社後、クリエーティブ局を経て1968年に円満退社しニューヨークに移住。以来、アメリカの広告界、トレンドなどに関する論評を各種の雑誌、新聞に寄稿。著書として『ザ・セリング・オブ・アメリカ』(日経出版)、『普通のアメリカ人』(研究社)など。翻訳には『アメリカ広告事情』(ジョン・オトゥール著)、『アメリカの心』(共訳)ほか多数あり。「日経マーケティングジャーナル」「ブレーン」「日経広告研究所報」「広研レポート」などに連載中。

る。家族がそれほど大切なら、なぜアルコール依存になったり、女子どもに危害を加えるのか？　ヒルビリーは働き者だというのなら、なぜミドルタウンにはこんなにたくさんの失業者がいるのか？　生涯、生活保護を受ける人間がなぜこんなに多いのか？　高校時代、アルバイトしていたタイル工場での同僚が、「朝早く起きるのが嫌だから」という理由で仕事を辞め、Facebookで「自分はオバマの経済政策の犠牲者だ」と嘆いているのを見てあぜんとしたこともある。また、スーパーマーケットのレジのアルバイトをしていたとき、フードスタンプ（注：生活扶助のために、米国政府が発行する食料割引券）で食品の支払いをしながら、最新の携帯電話をこれみよがしに使っていた失業者を何人も見た。

ヒルビリー・カルチャーに潜む最大の問題は、自分の不幸の原因は、全て社会と政府の責任だと考えていることだとバンスは書く。「テレビニュースも、政治家も信じない。よりよい生活に入るための門戸である大学は、ヒルビリーを排除する方法を講じていると信じている。そして、ほとんどのヒルビリーが、自分の人生は自分ではコントロールできないとし、自分が置かれている惨めな状況は、自分以外の全ての人間のせいだと非難する」。彼らは、「ラーンド・ヘルプレスネス」、つまり経験によって身に付けた絶望感を持って生きているのだ。

そんなヒルビリー・カルチャーが充満するアパラチアの人たちにとって、トランプは彼らの抱えている問題が、グローバリゼーションの結果であることを口にした最初の政治家であった。彼は、「昔のような偉大なるアメリカを取り戻すのだ。外国に取られてしまった仕事を再び取り戻し、君たちに仕事を与えるのだ」と約束した。どうやって仕事を取り戻すのかという具体案は何もなくても、そんなことはヒルビリーにとって問題ではなかった。トランプは、「自分たちに仕事を与えてくれると約束した最初の政治家」であった。

言うまでもなく、彼らのこの理解は間違いである。歴代の大統領が、アパラチア地域の貧困問題を解決しようとさまざまな手段を講じているからだ。ただ、『ニューヨーク・タイムズ』紙の社会評論家デイビッド・ブルックスは「トランプのアポカリプス的（黙示録的）で大げさな表現や、4文字語（注：卑語）を使うトランプの喋り方が、彼らに親近感を持たせたのだ」と書いている。彼らは自分たちの置かれている貧困や麻薬依存や、離婚や自殺などの問題が、トランプによって全て解決されると信じたのだ。

ヒルビリー・カルチャーの裏側

ヒルビリー・カルチャーは、なぜそれほどまでに防御的で、偏狭で、時間の中で凍結してしまっているのか？　著者は「どんな文化も、真空状態の中では生まれない。ヒルビリー・カルチャーが生まれた反対側には、都会人がヒルビリーに対して持つ“軽蔑”が作用している」と書いている。事実、バンスが経験した海兵隊生活は、あらゆる人種、あらゆる階級が寄り集まったるつぼであった。その中で、バンスはヒルビリー以外の人間たちの習性を知り、その中から多くを学んだ。軍隊は彼にとってはポジティブな経験だったのである。だが、除隊後入ったオハイオ大学、そして特に名門イェールでは、バンスは自分の生い立ちをある程度、秘密にする必要を感じた。イェールでは、学生も教授陣も、ヒルビリー・カルチャーとは反対側にあるエリート・カルチャーを導入することをよしとしていた。バンスにとって海兵隊での経験は、誇り以外の何物でもなかったが、イェールの同級生の多くは、軍隊を軽蔑する態度を持っていた。自分たちの隣に元海兵隊員が座っていることなど、考えてもいなかったのである。

“怒り”が“同情”に変わるとき

『ヒルビリー哀歌』は、2つの部分から成っているといえよう。1つはバンスの子ども時代のメモアール、もう1つはヒルビリー・カルチャーから脱出した著者が、後ろに残してきた愛する人たちに対して投げかける幾つかの疑問である。母親の薬物依存はエスカレートしてヘロインに移行した。こんな人間になった母親は、ヒルビリー・カルチャーの犠牲者なのだろうか？

「ヒルビリーは、地球上で一番タフな人間たちだ。しかし、我々は鏡に映る自分の顔を見つめて、自分の行為が子どもたちに与えている多くの危害を認めるだけのタフさがあるだろうか？　政府の公共政策は助けにはなる。しかし、どんな政府も、ヒルビリー・カルチャーに潜む文化的問題を解決することはできない。問題解決の答えはどこにあるのか自分にもわからない。ただ一つわかっていることは、オバマや、ブッシュや、顔の見えない大企業を責めるのをやめて、自分たちの手で生活を改善することはできないかと自問し始めるとき、ヒルビリー・カルチャーの改善が始まるということだ」

自問すべきなのは、彼らを見下げ、米国の恥部として見て見ぬふりをしてきたエリートたちなのかもしれない。